

## ウイグル語における動詞由来の複合名詞

藤家洋昭 (大阪大学)    Reyihan Pataer (甲南女子大学)

### 1. はじめに

語と語があわさってより大きな別の語を形成する現象は特に珍しくなく、日本語や英語において一般的に広く見られる。また、ある語の品詞が変わる現象も同じく広く観察することができる。

ウイグル語 (Uyghur Tili) においても、両方の現象が見られ、基本的なことはそれぞれ記述されている[5][6]。ところが、両者を同時に持つ現象すなわち語と語があわさって品詞が変わる現象については、これまでほとんど明らかにされてこなかった。それらの中から本研究では動詞由来の複合名詞をとりあげ、記述する。

### 2. 動詞由来の複合名詞

動詞由来の複合名詞とは、動詞が何らかの語をとまって名詞に派生したものである。日本語では「ものしり」「缶切り」「花見」などがこれに当たる。動詞由来の複合名詞は複合語の一種である。複合語は語 (word) の一種であるから、語に特有の性質を持っている。語に特有の性質の中でここで重要なのは形態的緊密性と名付け (naming) である。形態的緊密性とは、語が緊密なまとまりを構成し統語的な規則は語の内部にまで浸透できないことである[2]。名づけとは、慣習化した、句や文による言い換えにはないような特別な意味が込められることである[2]。例えば、語である「花見」と句である「花を見ること」を比べてみると、「花見」には「花を見ること」にはない、「春、桜の花を觀賞する」というような

特別な意味がある。複合語は語の一種であり、この点で、やはり語と語が合わさって、一見同じように見える、句 (phrase) とは異なる。

複合語形成のメカニズムは言語によって異なり、例えば日本語と英語の間にも違いがあることが指摘されている[3]。ウイグル語に関しては、動詞由来の複合名詞の研究はこれまでほとんどされてこなかった。

ウイグル語は主辞 (head) 後置型の言語であり、同じく主辞後置型の言語である日本語と要素の配列が基本的に同じである。すなわち、目的語は述語に先立ち、文法的な形式は接尾辞のような形で後ろにつく。このため、動詞から名詞が派生する場合も、動詞本体の後ろに名詞化の形式がつく。動詞から名詞を派生する形式は、先行研究[5]では17あげられているが、多くは生産性があまりなく、それによってできた名詞の意味の透明性も低い。本研究では、-ghu, -ghuch, -ghuchi, -ish をとりあげ、それらからできた名詞を扱う。なお、これらは、子音同化などにより、実際は -ghu ~ -qu ~ -kü ~ -gü, -ghuch ~ -quch ~ -küch ~ -güch, -ghuchi ~ -quchi ~ -küchi ~ -güchi, -ish ~ -üsh ~ -ush ~ -sh として現れるが、本研究では、-ish, -ghuch, -ghuchi, -ghu をそれぞれの代表として扱う。大まかな意味は、-ghu と -ghuch が「～するもの」-ghuchi が「～する人」-ish が「～すること」になる。これらからできた動詞由来の複合語は、

「 何 ら か の 語    動 詞 語 幹 +  
-ish/-ghu/-ghuch/-ghuchi 」

というパターンになる。

### 3. 基本データと考察

#### 3.1 基本データ

ここでは、動詞から派生した名詞とさまざまな要素が結びついているように見える例を見ていく。

-ghu

(1) ün al·ghu

音声 取る・ghu 「録音機」

-ghuch

(2) kiyim as·quch

着物 つるす・ghuch 「ハンガー」

-ghuchi

(3) roman yaz·ghuchi

小説 書く・ghuchi 「小説家」

(4) a. Rusiye yaz·ghuchi·si

ロシア 書く・ghuchi·si 「ロシアの作家」

b. \*Rusiye yaz·ghuchi

ロシア 書く

(5) baldur tur·ghuchi

早く 起きる・ghuchi 「早起き (の人)」

(6) köp ich·quchi

多く 飲む・ghuchi 「多く飲む人」

(7) télévizor kör·güchi

テレビ 見る・ghuchi 「テレビ視聴者」

-ish

(8) qar yégh·ish

雪 降る・ish

(9) télévizor kör·üsh

テレビ 見る ish

(10) a. \*tagh chiq·ish

山 のぼる ish

b. tagh·qa chiq·ish

山・に (与格) のぼる ish

(11) a. \*qérindash yéz·ish

えんぴつ 書く ish

b. qérindash bilen yéz·ish

えんぴつ で 書く ish

(12) a. til ögin·ish

言語 学ぶ·ish 「言語学習」

b. \*til ögin·ish qildi

言語 学ぶ ish した

(13) ögin·ish qildi

学ぶ·ish した 「学習した」

#### 3.2 考察

3.1 で見たデータを考察する。

まず、動詞-ghu, 動詞-ghuch の前に来る要素はいずれも直接目的語である。動詞-ghuchi も直接目的語が前に来るが、Rusiye が前に来る例があり、この場合、「ロシアを」書くという意味はなく、Rusiye は直接目的語とは考えられない。「ロシアが」でもなく「ロシアで」でもない。Rusiye と yaz- はいかなる文法関係にもないと言える。さらに、後ろに -si が付いていることが他の例との違いと言える。baldur turghuchi, köp ichquchi のように、直接目的語ではなく、修飾語と複合しているように見える例がある。動詞-ish の前に来る要素も、直接目的語が観察される。直接目的語以外では、与格が付いたもの、道具を表す後置詞 "bilen" をともなったものがあるが、これらはいずれも格を表す形式や後置詞をとりのぞいた形では非文法的になる。

日本語では、「ワックスがけする」のように、動詞由来複合名詞で「する」をともなって述語として働くものがある[3]。ウイグル語はこの点どうだろうか。ウイグル語において「する」に相当する具体的な意味の希薄な動詞は "qil-" である。-ish で終わるものは基本的に出来事をあらわすので、述語として働いてもいいようだが、述語として働く例を見つけることはできていない。

## 4. 分析

### 4.1 形成のプロセス

動詞由来の複合名詞は全体として名詞になっているわけだが、どのようなプロセスで名詞になっているのだろうか。動詞の部分がまず名詞になり、前の要素と複合するのか、それとも、前の要素と複合してから名詞かするのだろうか。

(3) と(4) を見られたい。両者とも一見、*yaz-*「書く」から派生した複合名詞に見え、その構造は平行しているように見える。ところが、語末の*-si*の有無で文法性が逆になっている。すなわち、*-b*は*-si*が必須である。ウイグル語では一般に、名詞が二つ並んで名詞+名詞型の複合名詞を形成する場合、後ろの名詞に*-si*が付く。(4)にあるようにこの*-si*は必須である。このことからすると、(4)も*yaz-*がまず名詞である *yazghuchi* になり、*yazghuchi* が、名詞である *Rusiye*「ロシア」と複合し、名詞+名詞型の複合名詞であるため、後ろに*-si*がついたと考えることができる。意味の面を考えると、前章でも指摘したように、*Rusiye* と *yaz-*は格関係にない。「ロシアが」書くわけでも「ロシアを」書くわけでも、「ロシアで」書くわけでもない。「ロシア」と「書く」の間にはつながりがない。このことから *rusiye* と *yaz-* が先に複合したわけではないことが裏付けられる。これとは反対に、(3) は *roman* と *yaz-* が先に複合したと考えられる。

### 4.3 語か句か

一般に、語には統語的な要素の排除、ということがある[2]。複合語も語であるから統語的な要素は排除される。(10)b.を見ると、明らかに統語的要素である格語尾がついている。すると、一般論からいうと、これらは語では

ない、ということになる。つまり、これらは、例えば *taghqa chiqish* であれば、「山登り」ではなくて、「山に登ること」ということになる。ただ、*-ish* が付くものが常に句とは言いきれず、*öginish* のような、明らかに名詞であるものもある。さらに、主語について見てみると、興味深い事実が観察できる。ウイグル語では通常主語は主格で表わされるが、主格を表す格形式はなく、名詞の後ろに何もつかない。このため、*qar yéghish* を見ても、統語的要素がないからと言ってすなわち語であるとは言えない。そして、このタイプのパターン（主語+動詞-*ish*）が常に可能なわけでもないこともわかる。*bala oynash*「子供 遊ぶ-*sh*」は不可能である。この違いはおそらく *yagh-* は非対格動詞、*oyna-* は非能格動詞であることからきていると思われる。他動詞の主語と-*sh*が直接つながることも難しい\**bala körüsh* ことから、日本語等他の言語でもよく見られる、内項との複合はできて、外項との複合はできない、という事実とよく似ていることがわかる。しかし、それはあくまで「語」についてである。「句」についてではない。そうすると、*-ish*がついたものは語である可能性も出てくる。そこで、語か句かを見分けるために別の基準によるテストをする。語の一部だけを外部から指すことができない、という一般的な性質がある[7]。

(14) a. *Qar·ning yégh·ish·i bashlidi. U*

雪・の 降る・ish・i 始まった それ  
*érise bahar kélidu.*

とければ 春 来る「雪が降ることが始まった。それがとければ春が来る。」

b. *Qar yéghish·qa bashlidi. U*

雪 降る・に 始まった それ  
*érise bahar kélidu.*

とければ 春 来る「雪が降り始めたそれが  
とければ春が来る」

c. ?Qar yégh·ish bashlidi. U érise

雪 降る・ish 始まった それ とければ  
bahar kélidu.

春 来る

a. と b.がよくて、c.がよくないのは、u「それ」  
が雪ではなくて、降雪という現象を指してい  
て、雪は溶けることができるが、降雪という  
現象は溶けることができないからである。す  
なわち、語の一部を指すことができないとい  
うことを表していて、qar yéghish は一語とい  
うことになる。

いずれにしても、この問題は簡単ではない。  
今後の課題としたい。

#### 4.4 複合のレベル

直接目的語と修飾語が複合している例を見  
た。この二つパターンをどのように記述すれ  
ばいいだろうか。ここで、どのレベルで複合  
しているか考えてみたい。日本語と英語の複  
合に関する先行研究[3]では、複合のレベルと  
して、項と概念構造のレベルが指摘されてい  
る。本研究においてもその枠組みにしたがっ  
て分析する。副詞的修飾語は意味的には動詞  
全体ではなく、LCS の一部を修飾すると考え  
られる。ここで取り上げているものはすべて  
動詞由来であるので、動詞がどのような情報  
をもっているかである。本研究では、項構造  
と概念構造を HPSG に関する先行研究[1][4]  
にならって次のように形式化する。

ARG-ST [ · · · ]

LCS [ · · · ]

この中で、ARG-ST はその動詞が持っている  
項構造を、LCS はその動詞の語彙概念構造を  
表し、具体的な動詞、例えばいわゆる活動他  
動詞であれば次のようになる。

ARG-ST [EXT<1:3>, INT<2:4>]

LCS [[3] ACT ON-[4]]

そうすると、複合するレベルは ARG-ST か  
LCS かになり、具体的に複合するのは、  
ARG-ST の項または、LCS の意味述語という  
ことになる。例えば、kiyim asquch であれば、  
ARG-ST の INT が複合し、baldur turghuchi で  
あれば、LCS の ACT と複合する。

## 5. 結論

ウイグル語の動詞由来の複合名詞について、  
動詞の前に来る要素と動詞の関係、述語とし  
て働くかどうか、形成のプロセス、複合のレ  
ベルを記述した。結果、動詞の前に来る要素  
は直接目的語、修飾語であること、述語して  
は働かないこと、名詞化の形式が複合のあと  
につくこと、項レベルと LCS レベルで複合す  
ることがあることが明らかになった。

## 参考文献

- [1] 今泉志奈子・郡司隆男(2002), 「語彙的複  
合における複合事象」伊藤たかね(編)『文法理  
論:レキシコンと統語』東京大学出版会。
- [2] 影山太郎『形態論と意味』くろしお出版。
- [3] 影山太郎(編)『動詞の意味と構文』
- [4] 橋本力(2003)「計算機上で動作する日本語  
HPSG 文法の構築」『言語処理学会第9回年次  
大会発表論文集』言語処理学会。
- [5] Arslan Abdulla (ed.). (2010). *Hazirqi Zaman  
Uyghur Tili. Ürümchi. Shinjang Xelq Neshriyati.*
- [6] Arziyev R. (2006). *Uyghur Tili. Almuta.  
Mektep.*
- [7] Paul Postal (1969) "Anaphoric Islands" CLS  
5.